

本稿の目的

地球温暖化問題（以下では温暖化問題）に関しては、多くの不確実性が残っている。しかし、温暖化の人為的要因や対策の必要性に関して、これまでの知見や実状を無視するかのような議論も散見される。したがって、様々な論点を整理し、新たな知見や現在の状況などを紹介することによって、温暖化問題に関する建設的な議論を推進することの重要性は高いと思われる。

そのため、本稿では、現在起きている温暖化の要因を、産業革命以降の人為的な二酸化炭素の排出を主な要因とする考え方（以下では、「人為的排出二酸化炭素温暖化説」と呼ぶ）や温暖化対策の重要性などに対して、懐疑的あるいは否定的な言説となっている植田（1999、2004、2005a、2005b、2006、2007、2008）、薬師院（2002）、渡辺（2005、2006）、伊藤（2003、2005、2006、2009）、近藤（2006）、池田（2006）、矢沢（2007）、Lomborg（2001、2005、2007）、Durkin（2007）、武田（2007a、2007b、2007c、2008a、2008b、2008c）、Crichton（2007）、伊藤・渡辺（2008）、山口（2006）、丸山（2008a、2008b、2008c、2009）、武田・丸山（2008）、養老（2007）、赤祖父（2008、2009）などを中心に¹⁾、彼らの温暖化に関する主な議論への反論を以下のような5つの章に分けて整理した。

第1章：温暖化問題における「合意」

第2章：温暖化問題に関するマスコミ報道

第3章：温暖化問題の科学的基礎

- 3.1. 過去および現在の観測データに関する議論
- 3.2. 過去および現在の気候変化の原因に関する議論
- 3.3. 炭素循環に関する議論
- 3.4. 温室効果強化に対する気候システムの応答に関する議論
- 3.5. 地球大気の種類・光学特性に関する議論
- 3.6. 海水準変化に関する議論

第4章：温暖化対策の優先順位

第5章：京都議定書の評価

本稿は、「IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル）報告書などの結論に異を唱えること」に対して、すべて「懐疑論」のレッテルを貼ろうとしているわけではない。言うまでもなく、物事に対して懐疑的であることは科学の基本であり、常に必要なことである。IPCC報告書には、様々な対立する意見が検討され続けており、その上で、現時点においてもっとも状況

1) 日本語圏での温暖化懐疑論には、英語圏から直接持ち込まれたものもある。しかし、それに対する反論は英語圏で見つけることができる。したがって、私たちの反論では、Lomborg（2007）およびDurkin（2007：映画『The Great Global Warming Swindle（地球温暖化詐欺）』）を例外として、日本語圏内の人のオリジナル著作に見られる懐疑論に重点をおく。

をよく説明できる仮説が、その確からしさに関する定量的な議論とともに紹介されている。このような営みは、現在までに蓄積された科学的知見に基づいて、より深い理解をもたらすための「科学の営み」である。

ところが、今なお人為的排出二酸化炭素温暖化説の信頼性や温暖化問題の重要性に対して懐疑的あるいは否定的な議論には、次のような特徴をもつものが多い。

- ◎既存の知見や観測データを誤解あるいは曲解している
- ◎すでに十分に考慮されている事項を、考慮していないと批判する
- ◎多数の事例・根拠に基づいた議論に対して、少数の事例・根拠をもって否定する
- ◎定量的評価が進んできている事項に対して、定性的にとどまる言説を持ち出して否定する（定性的要因の指摘自体はよいことではあるものの、その意義づけに無理がある）
- ◎不確かさを含めた科学的理解が進んでいるにも関わらず、不確かさを強調する
- ◎既存の知見を一方向的に疑いながら、自分の立論の根拠に関しては同様な疑いを向けない²⁾
- ◎問題となる現象の時間的および空間的なスケールを取り違えている
- ◎温暖化対策に関する取り決めの内容などを理解していない
- ◎三段論法の間違いなどロジックとして誤謬がある

このような議論の多くは、これまでの科学の蓄積を無視しており、しばしば独断的な結論に読者を導いている。温暖化のリスクが増大している状況下で、このような議論が社会に広まることを科学者としては看過できない。したがって、私たちは懐疑論に対する具体的な反論をとおして、最新の科学的知見に関する情報発信を行うと同時に、地球温暖化問題の重要性に関する認識の喚起をうながしたいと考える。

他の参考資料

本稿は、2005年度環境経済・政策学会（2005年9月東京）での討論資料および2006年2月18日に東京の高千穂大学で開催された明日香壽川・吉村純と植田敦・中本正一朗両氏による「地球温暖化に関する公開討論会」の明日香・吉村側からの資料をもとに修正・加筆を行ったものである。したがって、本稿とともに、この「地球温暖化に関する公開討論会」の発表資料を合わせてご一読いただくと、懐疑論が持つ論理不整合性に対する理解が深まる（明日香壽川・吉村純のパワーポイント発表資料は、<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/china/asuka/>からダウンロード可能）。

また、同様の趣旨で異なった読者層を対象に、明日香ら（2006）、増田ら（2006）、明日香（2007）、明日香・神保（2007）、江守（2008）、明日香ら（2009）、国立環

2) 「人間は、人に騙されるよりも自分に騙される」というドストエフスキーの言葉がある。